

第4節 間之原遺跡出土の紀年銘が刻書された紡輪について

紡輪は、糸の繊維素材に撚りをかけるために使用する紡錘車の弾み車である。平成22年度と平成24年度の間の間之原遺跡における発掘調査によって、土製品4点、石製品2点の紡輪が出土した。9世紀第4四半期の1区10号・29号竪穴住居埋没土から土製品、9世紀第3四半期の1区54号竪穴住居掘り方から須恵器杯或いは碗の底部を二次加工したもの、遺構外では1区遺構確認面から須恵器杯の底部を二次加工したものであり、石製品については、1区16号掘立柱建物の柱穴埋没土と3区遺構確認面からそれぞれ1点ずつ出土している。

出土した紡輪のうち刻書など文字が認められるものは1点のみである。この紡輪が出土した1区16号掘立柱建物(第267・268図PL70・97)は、古墳時代後期に比定する1区58号竪穴住居が廃絶されて完全に埋没したあとに建てられた掘立柱建物であり、柱穴を8基確認した。刻書された紡輪は7号ピット壁際の埋土上部から出土し、紀年銘の書かれた面が下向きになっていた。7号ピットから出土した6世紀後半の土師器杯も刻書された紡輪と同様に柱穴の埋没土に混入したものと考えられる。他の柱穴から出土遺物がなく時期の比定は難しいが、1区58号竪穴住居との重複や刻書された紡輪の出土などから時期を平安時代とした。

刻書された紡輪は円盤状で、断面形は逆台形である。中央部には、回転軸を挿入するための孔を穿つ。規模は、上面径4.02～4.10cm、下面径3.10～3.30cm、厚み縁辺1.05～1.18cm、孔周辺1.25～1.28cm、上面孔径0.85～0.95cm、下面孔0.95cm、重さは33.87gをそれぞれ測る。石材については、蛇紋岩であった。

紡輪に刻書された文字については、高島英之氏によって下面「天長七年正月三日」、側面「三」カ「川」カ、上面「日奉マ」と釈読された。表面の観察からは、紡錘車の紡輪としての長期間の使用による摩滅が顕著に認められ、この摩滅の上に刻書されていることが分かる。紡輪の表面には、引っ搔いた傷のような文字が刻まれ、先端が尖った鋭利な器具のようなものを使用していた。紀年銘は、紡輪の下面に明瞭に残存し、「天長七年正月三日」の年月日が刻まれている。この紀年銘は縦書きではなく、紡輪下

面を右回りに回しながら左から右へ一周するように横書きしている点に特徴がある。「天・長・七・年・正・月・日」の文字は、紡輪の孔に対してそれぞれ上向きに刻書し、配置されているが、「三」だけは文字の向きが左側に傾く。字間については、「天・長・七・年・正・月」の文字間隔をやや広く開け、「三日」は文字間隔が詰まっている。一月については「正月」と刻書している^{註1)}。側面の刻書については、紡輪下面「月」の隣接箇所に「三」或いは「川」と読めるような線刻が認められるが下面のように明瞭ではない。

紡輪上面には長期間の使用による線状痕があらゆる方向に無数に認められる。紡輪下面の年月日のような明瞭さはなく「日奉マ(部)」「ひまつりべ」と高島氏は釈読しているが、線状痕と線刻文字との区別は困難であり判然としない。なお「日奉マ(部)」とは祭祀を司ると考えられている品部の一つであり、氏族を示すものである。

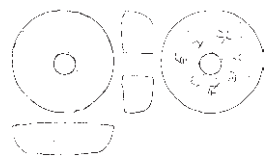
群馬県内の発掘調査では、これまでに県内各地域から紡輪が出土している。矢田遺跡では、「物部郷長」と「氏名」が刻書された紡輪^{註2)}を含めこれまでに122点の紡輪が出土するなど県内では群を抜く数であり、県南西部に位置する吉井町(現高崎市)地域からの出土が数多く報告されるなど^{註3)}、古代より紡錘車を使用した糸生産が盛んに行われていたことに深く関連すると考えられている。刻書された紡輪については、関東地方の北部に位置する埼玉県北西部から群馬県南西部など限られた地域に濃密に分布することが指摘され^{註4)}、高島氏の集成によると群馬県内では64点、埼玉県内では61点、東京都では6点が出土している^{註5)}。

刻書された紡輪のうち紀年銘が刻書されたものに限ると、間之原遺跡以外では、佐賀県小城市の丁永遺跡出土の石製紡輪(丁亥年六月十二日・西暦687年)^{註6)}、東京都日野市の落川遺跡出土の石製紡輪(和銅七年十一月二日・西暦714年)^{註7)}、埼玉県川越市の仲遺跡出土の石製紡輪(大同元年七〇十四日・西暦806年)^{註8)}、埼玉県上里町の若宮台遺跡出土の石製紡輪(天安二年十二月廿八日・西暦856年)^{註9)}の4点であり、間之原遺跡出土を含めてもわずか5点にすぎない(第41表)。間之原遺跡から出土した紀年銘が刻書された石製紡輪は、群馬県内初の出土となったが、紀年銘を含めて上面、側面、下面にそれぞれ文字が記載された石製の紡輪となると全国的にも類例が

第36表 紀年銘刻書紡輪一覧表

番号	遺跡名	調査場所	調査年月	刻書紡輪の概要
1	間之原遺跡	群馬県太田市龍舞町	2010.4.1~ 2010.9.30、 2012.4.1~ 2012.6.30	出土遺構：1区16号掘立柱建物7号ビット 石材：蛇紋岩 残存率：完形 上面径：4.02-4.10cm 下面径：3.10-3.30cm 厚み縁辺：1.05-1.18cm 孔周辺：1.25-1.28cm 上面孔径：0.85-0.95cm 下面孔径：0.95cm 重量：33.87g 線刻部位：上面・側面・下面 線刻文字：下面「天長七年正月三日」 側面「三」カ「川」カ 上面「日奉マ(部)」 年代：天長七年・西暦830年
2	丁永遺跡	佐賀県小城市	2区 2007.8.16~ 2007.10.11	出土遺構：2区小穴P70 石材：片状蛇紋岩(滑石を含むか) 残存率：完形 直径：4.58cm 厚さ：0.75cm 孔径：0.77cm 重量：27.5g 線刻部位：上面 線刻文字：「丁亥年六月十二日 赤※十万呂」 年代：丁亥年・西暦687年 ※木偏に是
3	落川遺跡	東京都日野市落川	1993.4.1~ 1996.3.31	出土遺構：住居SI36の床面から出土 石材：輝緑岩か 残存率：完形 上面径：4.2cm 下面径：2.7cm 厚さ：1.8cm 孔径：0.7cm 重量：54.6g 線刻部位：上面 線刻文字：「和銅七年十一月二日鳥取部直六手縄」 年代：和銅七年・西暦714年
4	仲遺跡	埼玉県川越市	1952	出土遺構：表採 石材：滑石 残存率：完形 径：5.3-5.4cm 厚さ：1.0cm 線刻部位：上面 線刻文字：「大同元年七□十四日」 年代：大同元年・西暦806年
5	若宮台遺跡	埼玉県児玉郡上里町大字帯刀	1974.11.8~ 1976.1.22	出土遺構：第44号住居跡(国分第Ⅱ期) 石材：滑石 残存率：完形 重量：57g 刻書部位：上面 線刻文字：「天安二年十二月廿八日 □成」 年代：天安二年・西暦856年

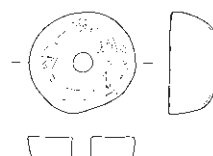
4は大川原竜一・黒済玉恵 2009「資料紹介：川越市仲遺跡出土刻書紡錘車の調査」『明治大学古代学研究所紀要』10より転載。
それ以外は各報告書より転載。



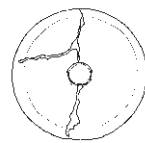
1. 群馬県 間之原遺跡



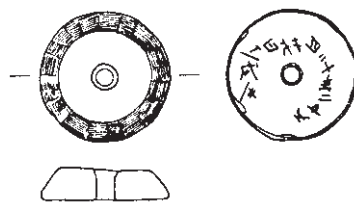
2. 佐賀県 丁永遺跡



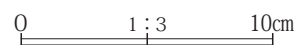
3. 東京都 落川遺跡



4. 埼玉県 仲遺跡



5. 埼玉県 若宮台遺跡



第329図 紀年銘が刻書された紡輪

ない稀有で重要な資料の一つである。

紡輪に文字などを刻書する目的などについては未だ明確ではない。これまでのいくつかの論考では、仏教信仰に関わる文字や絵画などが記されることから本来の用途ではなく、仏事をはじめとする儀礼の場での使用^{註10)}、集落の中における何らかの呪術、祭祀、儀礼などの行為を行った年月日とその行為の主体者や祈願者である人名を刻書した可能性^{註11)}の他、調庸布製作などに関わる地名や所有者名^{註12)}、人物葬送儀礼において紡錘車を供献する儀礼行為^{註13)}、などが考察されている。しながら祭祀や儀礼などが行われたとするような明確な事例が示されておらず、確証を得るには至らない。間之原遺跡でも、刻書された紡輪の出土した1区16号掘立柱建物をはじめとして調査区内において祭祀や儀礼などを行った痕跡があるか慎重に発掘調査を行ったが、確認することができなかった。

文字資料については、間之原遺跡1区及び3区の発掘調査によって墨書土器が15点出土している。墨書土器のほとんどが8～9世紀に比定される竪穴住居からの出土である。墨書土器には紀年銘などが刻書された石製紡輪に関連するような文字は認められなかった。

石製紡輪の下面に刻書された「天長七年」は、西暦830年である。間之原遺跡の周辺地域における「天長七年」に発生した事件や自然災害などを記した資料は確認できなかったが、「天長七年正月三日」に該当する資料を探したところ、『類聚國史』巻第七十一の中に、「天長七年正月三日」に発生した出羽国の大地震に関する被害状況などの上奏が行われていたことが記されていた。この災害に関する記録については、出羽国から遠く離れた間之原遺跡と直接関連する資料になり得るとは考えがたい。しかしながら、2011年(平成23年)に発生した東日本大震災では、本県でも各地域で様々な被害が生じていることなどから、資料として記録には残らなかったが、間之原遺跡の周辺地域でも何らかの被害があったかもしれない。また、紡輪に刻書された「天長七年正月三日」以前に何らかの事件、災害、疫病などが発生していたことも考えられる。「正月三日」に祭祀や儀礼などが行われたとすると、元日や二日でなく三日にどのような事が行われていたのか、正月に紡輪を使用した祭祀や儀礼などが他にあったのか、間之原遺跡の所在地で刻書されたものか或いは他

所で刻書されたものが持ち込まれたか、など出土遺物だけでは解明できない点も多く残る。

今後も発掘調査によって出土する紀年銘などが刻書された紡輪をはじめ他の文字資料などを求めながら、紡輪に文字が記された経緯や目的などについてさらに検討する必要がある。

註

註1)高島英之氏は、註5)・註12)で「一月」と釈読しているが、記者発表資料などで「正月」と釈読しており本報告書でも「正月」を用いた。

註2)関和彦 1991「物部郷長の世界」『矢田遺跡Ⅱ』平安時代住居跡編(2)(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、小林昌二 1992「物部の分布とその意味について」・高島英之 1992「矢田遺跡出土の平安期における文字資料について」『矢田遺跡Ⅲ』平安時代住居跡編(3)(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

註3)小根澤雪絵 2008「多胡郡の紡錘車生産」『紡む』吉井町多胡碑記念館

註4)高島英之 2006『古代東国地域史と出土文字資料』

註5)高島英之 2014「伊勢崎市間遺跡出土刻書紡錘車」『本関町古墳群・間遺跡(2)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

註6)小城市教育委員会 2010『北小路遺跡1・2区 丁永遺跡1・2・4・5区』・小城市教育委員会 2008「丁永遺跡出土刻書紡錘車説明資料」『調査研究報告書第3集』小城市立歴史資料館・小城市立中林梧竹記念館

註7)日野市落川土地区画整理組合 1998『おちかわ』

註8)大川原竜一・黒済玉恵 2009「資料紹介：川越市仲遺跡出土刻書紡錘車の調査」『明治大学古代学研究所紀要』10

註9)(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 第28集 関越自動車道関係 埋蔵文化財発掘調査報告書-XⅡ『若宮台』

註10)宮瀧交二 2000「日本古代の民衆と「村道」『村のなかの古代史』野田嶺志編、同 2006「刻書紡錘車からみた日本古代の民衆意識」『古代の信仰と社会』国士舘大学考古学会編

註11)井上唯雄 1987「線刻をもつ紡錘車について」『古代学研究』115古代学研究会

註12)高島英之 2014「紀年銘刻書紡錘車の基礎的研究」『日本古代の国家と王権・社会』吉村武彦編

註13)大谷徹 1998「新屋敷古墳群の様相」『新屋敷古墳群D区』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

参考文献

高島英之 2008「文字が書かれた紡錘車」『紡む』吉井町多胡碑記念館

新倉明彦・中沢悟・高島英之 2010「太田市間之原遺跡出土の紀年銘紡錘車について」『埋文群馬』N0.52(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団